

# 体育分野における同一種目の模擬授業に対する「省察」の観点： ハンドボールを事例に

永野翔大\*・田代智紀\*\*・寺田進志\*\*\*

## I. 緒言

### 1. 保健体育科教員養成課程における模擬授業の実際

近年、「実践的指導力」<sup>1)</sup>を身につけた保健体育科教員（以下、体育教師とする）を養成するために、保健体育科教員養成課程の中で、模擬授業を実施する大学が増えてきている<sup>2)</sup>。その有効性に関しては、既に多くの先行研究において報告されている<sup>3)4)5)</sup>。しかし、その実際は、学習指導要領で示されている「体づくり運動」「器械運動」「陸上競技」「水泳」「球技」「武道」「ダンス」「体育理論」の8つの領域<sup>6)7)</sup>の中から、それぞれの領域に内包されている種目を選択する形式で実施されていることが多い。そのため、体育教師志望の学生は、全ての種目に関する模擬授業を経験することができておらず、種目に関する専門的な指導力が身につけているとは言い難い。これは、種目ごとの専門教員や時間の確保が難しいことから、全ての種目の模擬授業を実施できるカリキュラムの構築が困難なためだと考えられる。また、福ヶ迫・坂田<sup>8)</sup>は「模擬授業の実際は、人的条件からすべての学生に十分な指導経験を保証できない」と指摘している。以上のように、全ての種目を対象とした模擬授業を展開させるためには、物理的な多くの課題を抱えている。そのため、保健体育の教員養成に関わる大学教員は数少ない模擬授業の中で、より質の高い指導を行うことが求められる。具体的には、それぞれの学生に自ら成長してもらうために、授業力形成の中核をなす「省察」する力<sup>9)</sup>を身につけさせることが重要だと考えられる。

省察とは「何が問題であるのかを明らかにし、問題解決という目的に照らして、手段としてどの授業行動がふさわしいかということ」を仮説としてあれこれ考えをめぐらせる手段-目的分析を行い、それを実際に検証していく探求の過程<sup>10)</sup>である。木原ほか<sup>11)</sup>は、模擬授業を行った学生は「省察」する力が身につく可能性があると報告している。

### 2. 「省察」の観点を明らかにする必要性

初心期の体育教師<sup>(注1)</sup>は、あらゆる面において経験が乏しいため、授業で起こる問題を問題として認識できていないという難しさに直面している<sup>12)</sup>。このことは、保健体育科教員養成課程の学生にも同様のことが言えると考えられる。初心期の体育教師や保健体育科教員養成課程の学生が成長するためには、自己の教授行為を「省察」することで自分の問題を発見し、教授知識や意思決定のレパートリーを増やすことが重要となる<sup>13)</sup>。初心期の体育教師による「省察」は、熟練した体育教師がその自立を見守り、援助すること<sup>14)</sup>、すなわち熟練した専門家（メンター）とメンタリングの関係を築くことによって促される<sup>13)</sup>。このことは、保健体育科教員養成課程では、学生と授業担当の教員との関係に置き換えられると考えられる。そのため、模擬授業を行った学生の「省察」の観点を明らかにできれば、それを促すメンタリングを充実させるための知見を得ることができると考えられる。

\*東海学園大学スポーツ健康科学部、\*\*九州共立大学スポーツ学部

\*\*\*新潟医療福祉大学健康科学部

### 3. 保健体育科教員養成課程の模擬授業に対する「省察」に関する先行研究

これまで、保健体育科教員養成課程の模擬授業に対する「省察」に関する研究として、日野・谷本<sup>15)</sup>は、大学生を対象とした模擬授業、実際の中学生を対象とした模擬授業、教育実習での授業の3つの授業において、授業を行った学生による「省察」の実態を明らかにした。その結果、実際の中学生を対象に授業を行わないと実態把握の観点を持ちづらいこと、教授行為はどの授業においても「省察」されやすい観点であることなどを明らかにした。しかし、この研究では、模擬授業で対象とした種目内容の統一が図られていなかったため、領域や種目に専門的な「省察」の観点までは明らかにしていない。

以上のことから、体育分野における各領域の種目ごとに専門的な「省察」の観点を明らかにできれば、メンタリングを促す有用な知見が得られ、種目ごとに専門的な指導力の向上につながる可能性が生まれると考えられる。

### 4. 目的

本研究では、学生が行った体育分野に関連する同一種目の模擬授業に対する「省察」の観点を明らかにすることを目的とする。本研究の目的を達成することによって、学生が行った模擬授業に対するより良いメンタリングを可能にする知見を得ることができ、種目に関する専門的な指導力の向上を図ることができると考えられる。

## II. 方法

### 1. 対象

対象者は、2017年度にX大学の3年生を対象に開講された「コーチングハンドボールA」を受講した16名とした。対象者は2年次に「ハンドボールA」「ハンドボールB」を受講しており、ハンドボールの行為者としての経験を有していたが、ハンドボールを専門種目とする者はいなかった。なお、全ての授業担当の講師を筆頭研究者が務めた。

「コーチングハンドボールA」では「中学校や高校でハンドボールの授業を教えられること」を目的の一つとしていたため、受講生に対し50分間のハンドボールの模擬授業を2人組で行わせた。なお、模擬授業は中高生を対象とし、主にオフENSEの個人戦術力の向上を目指した内容だった。それぞれの受講生に模擬授業を行わせた後、自身の授業に対する自己評価（良かった点、改善点）をリフレクションシートに記入させた。本研究では、このリフレクションシートを分析対象とした。学生には研究の趣旨説明とともに協力を依頼し、自由意志のもとに研究の同意を得た。

倫理的配慮は、筆頭研究者の所属機関における研究倫理委員会の審査により承認を得た。また、対象に対する倫理的配慮・個人情報の保護に関しては、日本学術会議声明「科学者の行動規範について」に策定されている「科学者の行動規範－改訂版－」<sup>16)</sup>の内容を厳守した。

### 2. 分析方法

#### (1) 分析手順の概略

本研究では、永野ほか<sup>17)</sup>を参考に以下の方法を採用した。まず、それぞれの受講生が記述したリフレクションシートに記述されている内容を文字起こし、それを一つにまとめたテキストを作成した。次に、テキストを対象にテキストマイニング分析を行い、テキスト内で重要な語句、すなわちキーワードの抽出を行った。そして、キーワードがテキストの中でどのように使われているのかを明らかにするために、キーワードを含む文章を文脈が理解できるようにテキストから引用した。最後に、引用した文章（以下、引用文とする）をもとに、「省察」の観点について解釈した。以下では、テキストマイニン

グ分析とキーワードの抽出方法、解釈の方法についてより詳しく説明する。

## (2) テキストマイニング分析

テキストマイニング分析とは、データマイニングの一種<sup>18)</sup>であり、テキストデータを何らかの単位(文字、単語、フレーズ)に分解し、これらの関係を定量的に分析する方法<sup>19)</sup>である。分析の対象となる元データを読んだだけでは解釈しきれない新たな知識の発見を目指している<sup>17)</sup>。

本研究では、テキストマイニング分析のソフトウェアとしてKH Coder2 (Ver.2.00f)を用いた。KH Coder2における共起分析のオプション設定を語の描写数30語に設定し、語と語の共起関係はJaccard係数を用いて算出した。

## (3) キーワードの抽出方法

まず、語と語の共起関係を明らかにするために、語の重要度を示す次数中心性をもとに共起分析を行い、共起ネットワーク図を作成した。共起ネットワーク図では、語と語の共起関係を直線で表し、共起関係の強さを直線の太さで示した。多くの語と直線で結ばれているほど次数中心性が高い語と捉えた。次に、サブグラフ検出媒介中心性をもとに実線でつながっている複数の語を比較的強く結びついている語群、すなわちサブグラフとして示した。そして、次数中心性において最も共起関係が多い語が形成しているサブグラフのすべての語をキーワードとして抽出した。

## (4) 解釈の方法

まず、筆頭研究者が解釈を行った。次に、解釈の客観性を高めるために、筆頭研究者と共同研究者の3人でトライアングレーション<sup>20)</sup>を行った。なお、執筆者はスポーツ系学部に所属するハンドボールとサッカーを専門とする大学教員だった。

# Ⅲ. 結果

分析の結果は図1と表1である。

図1に、テキストマイニング分析によって導かれた模擬授業の「省察」に関する共起ネットワーク図を示した。この図では、テキストの中でも次数中心性の高い30語が示されている。なお、それぞれの語を囲っている円が大きいほど、頻出語であることを表している。出現パターンの似通った語をグルーピングしたサブグラフは、「違う」「自分」「動き」「理解」「ゲーム」「難しい」「指導」「出る」の8語、「配分」「時間」「準備」「実際」「内容」「分かる」「思う」の7語、「部分」「改善」「プレー」「生徒」の4語、「練習」「良い」「状況」「変える」の4語、「授業」「メニュー」の2語、「出す」「声」の2語、「前」の1語、「速攻」の1語、「試合」の1語の9つに分類された。

最も多くの語と実線で繋がっている語、すなわち他の語との共起関係が最も多い語は「違う」の1語だった。そのため、「違う」とともにサブグラフを形成している「自分」「動き」「理解」「ゲーム」「難しい」「指導」「出る」の8語をキーワードとして抽出した。

表1に、上記の8語のキーワードと引用文を示した。キーワードである「指導」は「パートナーのアシスタントとしてしか、指導することができずに終わってしまったことがダメだった」などの9つ、「出る」は「大きな声を出すことができた」などの6つ、「難しい」は「指導者は難しい」などの5つ、「違う」は「指導する上で、どう言ったらわかりやすいのか、生徒が専門としている競技ごとでも理解力が違うので難しかった」などの4つ、「自分」は「自分達が思っていたことと違う動きになることがあるので、そういう場面が出てきた時の具体的な指導をもっとできるとよかったと思う」などの4つ、「ゲーム」は「楽しめるようにゲームをたくさん行ったことはよかった」などの4つ、「動き」は「ゲームになると目的と違った動きになることもあったので、そういう時にゲームを止めて指導するべきだった」などの3つ、「理解」は「自分をもっとハンドボールの理解を深めるべきだった」などの3つの引用文に使用された。

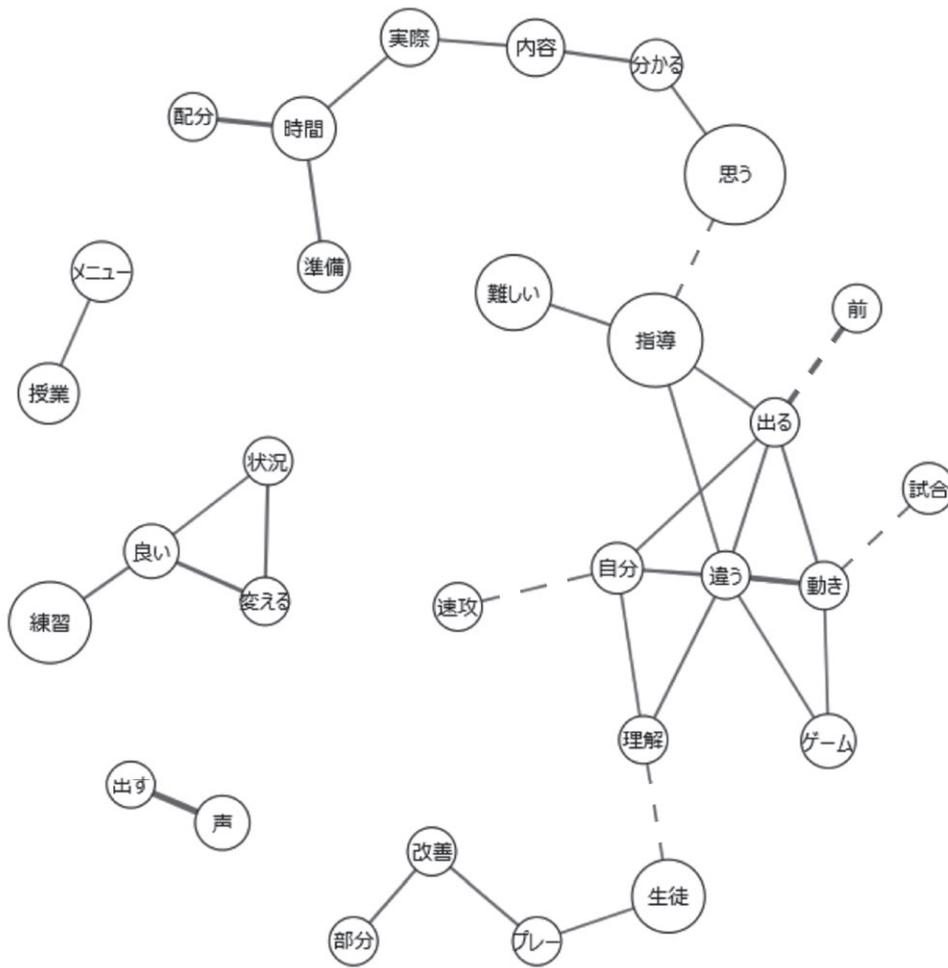


図1 模擬授業の「省察」に関する共起ネットワーク図

表1 キーワードと引用文

キーワード	引用文
	指導する上で、どう言ったらわかりやすいのか、生徒が専門としている競技ごとでも理解力が違うので難しかった。自分達が思っていたことと違う動きになることがあるので、そういう場面が出てきた時の具体的な指導をもっとできるとよかったと思う。ゲームになると目的と違った動きになることもあったので、そういう時にゲームを止めて指導するべきだった。3対2の速攻練習では、自分が勘違いをしてしまい、指導案に書いている内容と実際にやらせている内容にズレがあり、だらけさせてしまった。自分をもっとハンドボールの理解を深めるべきだった。
違う	自分の頭ではわかっているが、生徒に対してなかなか言葉で伝えることができなかった。
自分	試合に直結する動きを紹介できたことがよかった。説明が不十分だったので生徒はきちんと理解できていなかったと思う。
動き	楽しめるようにゲームをたくさん行ったことはよかった。ゲームが盛り上がったのはよかった。
理解	ゲームにつながる練習ができたと思う。指導者は難しい。
ゲーム	思っていたよりも教える側は難しいなと思った。教えることは難しい。
難しい	指導案上で考えていたことを実際にやらせることは難しいなと思った。生徒に楽しませることはできていたが、指導力がまだまだ足りないと思う。
指導	パートナーのアシスタントとしてしか、指導することができずに終わってしまったことがダメだった。もっと積極的に前に出て指導することができると思う。
出る	実際に指導者側に回ると、頭が回らない。もっと指導者であるという気持ちを持たなければいけない。個人的には、授業中に生徒を集合させ、指導者が思っていることを全員に伝えることができるともっとよかったと思う。大きな声を出すことができた。大きな声を出すのは苦手なので疲れた。声は出せた。もっと声を大きく出す。

## IV. 考察

### 1. ハンドボールの模擬授業に対する「省察」の観点

#### ①教師という立場の難しさに関する観点

教師は、教師になる以前に12,300時間以上の被教育経験を経ており、すでに授業観が完成されている<sup>21)</sup>。しかし、それは学習者の視点で形成されているため、教師として授業を実践する上で大きな障壁となる<sup>21)</sup>。

実際に「指導者は難しい」「実際に指導者側に回ると、頭が回らない」などの引用文から、学生は指導者、すなわち体育教師として授業を展開する難しさに関する観点を抱いていたと考えられる。

教師は、授業場面で生起する実践的な諸問題の表象と解決の思考を基礎とする、一連の選択と判断の活動<sup>22)</sup>を行うこと、すなわち授業中に多くの意思決定を行うことが求められる。具体的には、Clark and Peterson<sup>23)</sup>は、教師は平均して2分間に一度という高頻度で意思決定を行っていると報告している。しかし、初心期の教師は、熟練教師よりも適切に意思決定することができない<sup>22)</sup>。これは、引用文に改善点に関する記述が多いことから読み取れる。これらのことから、教師役の学生は、刻々と変化していく授業内で適切な意思決定を行うことができなかつたと考えられ、教師という立場の難しさに関する省察を行ったと推察される。

#### ②授業準備と実際の授業との乖離に関する観点

引用文に「自分達が思っていたことと違う動きになることがある」「ゲームになると目的と違った動きになる」「指導案に書いている内容と実際にやらせている内容にズレがあり」「指導案上で考えていたことを実際にやらせることは難しい」とあるように、教師役の学生は、指導案作成の段階で予想できていた授業内容と、実際の授業内容との間に乖離を感じていたと考えられる。

初心期の教師は授業に対して、授業者としての視点、観察者としての視点、一人ひとりの学習者の立場に立った視点などの多面的な視点を持つことが難しい<sup>22)</sup>。そのため、教師役の学生は指導案作成の段階においては、様々な視点に立った授業の予測が十分にできておらず、実際の授業においては、引用文に「自分達が思っていたことと違う動きになる」とあるように、学習者の視点に立った指導を行えていなかったと推察される。

#### ③説明の難しさに関する観点

「どう言ったらわかりやすいのか」「自分の頭の中ではわかっているけど、生徒に対してなかなか言葉で伝えることができなかった」「説明が不十分」「自分をもっとハンドボールの理解を深めるべき」などの引用文から、教師役の学生は説明の難しさに関する省察の観点を有していたと考えられる。

教師は、教科内容の知識を学問体系に沿って保持しているだけでは不十分であり、それを学習者の探求過程と結びつけた知識、すなわち「授業を想定した教科内容知識」として保持することが求められる<sup>21)</sup>。そのために、教師は学習者の視点に立ち、それぞれの探求過程を想定した上で教材解釈を行うことが求められる。教師役となった学生は、X大学の2年次に「ハンドボールA」「ハンドボールB」の授業を履修しており、ハンドボールの行為者としての学習経験があるため、教科内容の基本的な知識は有していたと考えられる。しかし、引用文に「自分の頭の中ではわかっているけど、生徒に対してなかなか言葉で伝えることができなかった」とあることから、教師役の学生は学習者の視点に立った教材解釈ができなかったと推察される。

#### ④声量に関する観点

引用文の「大きな声を出すことができた」「もっと声を大きく出す」から、声量に対する省察の観点を抱いていると考えられる。実際に、体育の授業において大きな声を出すことは、体育館やグラウンドなどの教室よりも広い空間において生徒を動かすという体育の特性上、有効であると考えられる。しか

し、実際の授業では、ただ闇雲に大声を出せば良いということではなく、状況に応じた声の出し方が必要だと考えられる。例えば、1つの体育館で2つの異なる授業を展開している場合などは、隣の授業へ配慮した声の出し方が必要となるだろう。このように声の出し方には様々な意味が存在していると考えられる。しかし、引用文には「声を大きく出す」などのように、声量に関する記述は見られたが、声を出す意味に関する記述は見られなかった。そのため、教師役の学生は声を出す必要性は感じているが、なぜ声を出さなければならないのかといった声出しの意味に関する省察はできていないと推察される。

#### ⑤試合につなげる意識に関する観点

球技の指導者は、常に試合を意識した練習を行うことが求められる<sup>24)</sup>。筆頭研究者も「ハンドボールA」と「ハンドボールB」の授業にて、その日の授業目的に応じた様々なルール制限を設けた試合を実践していた。そのため、教師役の学生は本時の目的を明確に設定し、それを試合に近い形式で点検するという、流れのある練習内容を用意する必要性を理解していたと考えられる。このことは、引用文の「試合に直結する動き」「ゲームにつながる練習」からも読み解くことができ、教師役の学生は、授業内容が試合につながっているのかといった省察の観点を抱いていると推察される。しかし一方で、引用文に「具体的な指導をもっとできるとよかった」「指導力がまだまだ足りないと思う」とあるように、ハンドボールの専門的な指導力は習熟していないと推察される。

## 2. 保健体育科教員の養成現場への提言

日野・谷本<sup>15)</sup>は、模擬授業を行った学生による省察の観点には、教授行動が多いこと、専門的指導の観点が少ないことなどを報告している。本研究の結果もそれを支持するものだったと考える。これは、教師役の学生の授業経験が不足しているためだと考えられる。そのため、種目に関する専門的な指導力を向上させるためには、教授行動に関する指導を充実させる必要があると考える。具体的には、教職科目以外の授業で模擬授業を行う際は、教職科目の授業担当教員と連携を図るとともに、教師役の学生に対して教授行動に関する指導を入念に行うことなどの対応が必要だと考えられる。そうすることで、教授行動以外の「省察」の観点が生まれる可能性があり、種目に専門的な内容に関するメンタリングの充実が図れると示唆される。

## V. 要約

本研究では、学生が行った体育分野に関連する同一種目の模擬授業に対する「省察」の観点を明らかにすることを目的とした。その結果、以下の知見が明らかとなった。

(1) 「省察」の観点は、「教師という立場の難しさに関する観点」「授業準備と実際の授業との乖離に関する観点」「説明の難しさに関する観点」「声量に関する観点」「試合につなげる意識に関する観点」の5つだった。

(2) 教授行動に関する「省察」の観点が多かった。

(3) 教師役の学生に対して、事前に教授行動に関する指導を充実させることで、より良いメンタリングが可能になると考えられた。

## 注記

(1) 教職3年目くらいまでを初心期、5～15年目くらいまでを中堅期、20年目以降を熟練期とした、吉崎<sup>25)</sup>による教師の発達段階に則った。

## 文献

- 1) 日本教育大学協会 (2004) 教員養成の「モデル・コア・カリキュラム」の検討:「教員養成コア科目群」を基軸にしたカリキュラムづくりの提案. 日本教育大学協会: p. 1.
- 2) 藤田育郎・岡出美則・長谷川悦示・三木ひろみ (2011) 教員養成課程の体育科模擬授業における教師役経験の意義についての検討. 体育科教育学研究, 27 (1): 19-30.
- 3) 長谷川悦示・岡出美則・高橋健夫・萩原武久・米村耕平・松本奈緒 (2003) 筑波大学における体育教師教育カリキュラム及び指導法の検討: 体育授業理論・実習 I・II・III の授業展開. 筑波大学体育科学系紀要, 26: 69-85.
- 4) 木原成一郎 (2004) 授業研究と教師の成長. 日本文教出版.
- 5) 岸本肇 (1995) マイクロティーチングによる体育授業の体験学習の効果に関する研究. 神戸大学発達科学部研究紀要, 2 (2): 195-202.
- 6) 文部科学省 (2009) 高等学校学習指導要領. pp. 69-75.
- 7) 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領. pp. 100-111.
- 8) 福ヶ迫善彦・坂田利弘 (2007) 授業省察力を育成する模擬授業の効果に関する方法論的検討. 愛知教育大学保健体育講座研究紀要, 32: 33-42.
- 9) 坂本篤史 (2007) 現職教師は授業経験から如何に学ぶか. 教育心理学研究, 55: 584-596.
- 10) 秋田喜代美 (1996) 教師教育における「省察」概念の展開: 反省的实践家を育てる教師教育をめぐる. 森田尚人ほか編 教育学年報 5 教育と市場. 世織書房. p. 452.
- 11) 木原成一郎・日野克博・米村耕平・徳永隆治・松田恵示・岩田昌太郎 (2008) 教員養成段階で行う体育の模擬授業の効果に関する事例研究: テスト映像を視聴した学生が気づいた体育授業の要素. 広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部学習開発関連領域, 57: 69-76.
- 12) 佐藤学 (1989) 教室からの改革. 国土社.
- 13) 久保研二・木原成一郎・大後戸一樹 (2008) 小学校体育科授業における「省察」の変容についての一考察. 体育学研究, 53: 159-171.
- 14) 岩川直樹 (1994) 教職におけるメンタリング. 稲垣忠彦ほか編. 日本の教師文化. 東大出版会. pp. 97-107.
- 15) 日野克博・谷本雄一 (2009) 大学の模擬授業並びに教育実習における省察の構造. 愛媛大学教育学部保健体育紀要, 6: 41-47.
- 16) 日本学術会議 (2013) 日本学術会議声明「科学者の行動規範-改訂版-」. 日本学術会議.
- 17) 永野翔大・ネメシュ ローランド・藤本元・會田宏 (2017) ハンドボール競技における強豪国と日本の一貫指導プログラムに関する比較研究. コーチング学研究, 30 (2): 109-123.
- 18) 稲葉光行 (2011) 第4部 応用編 18章 テキストマイニング. 末田清子ほか編著. コミュニケーション研究法. ナカニシヤ出版. p. 226.
- 19) 金明哲 (2009) テキストデータの統計科学入門. 岩波書店. pp. 64-72.
- 20) フリック:小田博志ほか訳 (2011) 新版 質的研究入門:<人間科学>のための方法論. 春秋社. p. 542.
- 21) 坂本篤史・秋田喜代美 (2012) 第II部エキスパートの仕事場から 第5章人を相手とする専門職 1 教師の実践知とは. 金井壽宏・楠見孝編. 実践知: エキスパートの知性. 有斐閣.
- 22) 佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美 (1990) 教師の実践的思考様式に関する研究 (1): 熟練教師と初任教師のモニタリングの比較を中心に. 東京大学教育学部紀要, 30: 177-198.
- 23) Clark, C. M., and Peterson, P. L. (1984) Teacher's Thought Processes. Michigan State

University. p.143.

- 24) シュテラー・コンツァック・デブラー：唐木國彦訳（1993）第3章ボールゲームにおける基礎訓練の内容と方法. 唐木國彦監訳. ボールゲーム指導事典. p. 51.
- 25) 吉崎静夫（1998）ひとり立ちへの道筋. 浅田匡ほか編. 成長する教師. 金子書房. p. 168.